

二葉亭四迷 最後のインタビュー（1909年）： ペテルブルグ ロシア知識人が見た二葉亭四迷の人と文学

キム・レーホ

ロシア科学アカデミー世界文学研究所

著しく発達した今日の情報状況のもとで、現代文学に関する新資料の発掘はほぼ不可能だろうと思っていたら間違いだった。そのうえ、近代日本文学史において、二葉亭は資料の収集と研究が最も進められている作家のひとりである。すでに1938年に岩波書店は9巻から成る《二葉亭四迷全集》を刊行、続けて1954年に17巻の《全集》、1965年には三度目の《全集》を出版している。日本における全集の編集が如何に周到綿密な調査に基づいているかは世に知られている。しかし、それも二葉亭に関する新資料の発見はもう見込みがないという証拠にはならない。

ロシア国立トルストイ博物館の図書館で材料を調べている中に、思いがけなく二葉亭四迷に関する新しい資料が眼についた。新聞『スローヴォ』（Слово）（1909年1月11日付）に「日本の小説家」というタイトルの記事が載っていた。記者А・トイルコワ（А.Тыркова）の署名がある。この記事は二葉亭のインタビューが元になっている。

「スローヴォ」紙は1903年1月から1909年7月まで首都ペテルブルグで刊行された。地方自治会制度擁護者達の機関紙として出発したが、その後、主に立憲君主党派の言論機関となった。I・エフレモフ（И.Ефремов）、М・スタホビチ（М.Стахович）、Е・トルベッコイ（Е.Трубецкой）など有名文士達が執筆した当時の有力新聞であった。

「スローヴォ」紙に載ったА・トイルコワの記事はソフィヤ・アンドレエヴナ・トルストイ夫人のスクラップ・ブックのコレクションに納められていた。夫人はロシアの各種新聞に発表されたトルストイに関する数々の記事、論文を切り抜いて大事に保存していた。横縦—36×50センチ、黒い布カバーの表紙。そのスクラップ・ブックの第8冊が1908年12月から1909年6月までのトルストイに関する新聞記事の切り抜きであった。通しページ1651-1746。

二葉亭が語る日本におけるロシア文学とその影響、トルストイ、『クロイツェル・ソナタ』に対する彼の意見が夫人の眼にうつったのだろう。結婚・家庭—この倫理問題に対する文豪の極端すぎる主張はソフィヤ・アンドレエヴナ夫人の反感を招き二人の間にひびが入ったひとつの原因ともなった。彼女はトルストイにその切り抜きを見せたに違いない。二葉亭のインタビューをトルストイは直接読んだと思う。日本に対する文豪の深い関心は世に知られている。

周知のように、二葉亭は1889年、内閣官報局の雇員となり『ノーボエ・ヴレーミヤ』、『ルースキー・インバリド』等の露文新聞雑誌の翻訳にあたったことがある。それから19年の後、1908年6月朝日新聞社ロシア特派員として渡露、首都ペテルブルグに滞在中『スローヴォ』紙のインタビューに従った。ロシアの出版界で行われた最初であり、また最後のインタビューであった。4ヵ月後彼はインド洋上に死す。

*

*

*

二葉亭が「スローヴォ」紙のインタビューに応じたのは、彼の意識的行為であったと思う。1908年6月6日、渡露直前に文学者たちが催した送別会席上で二葉亭は「実行と文学」について語っている。彼は「行動する人間」が必要だと云う。二葉亭はロシアに赴き何を行動に移そうとしたのだろうか？

日露両国の間に差し迫った軍事的脅威に対して強い不安を持ちながら、二葉亭は戦争の抑止力を国民に求めている。《将来の戦を避ける方法は唯一つ。それには両国民の意思を疏通せねばならぬ。日本国民の心持を露西亜人に知らせねばならぬ。それを何によってするがいいかと言へば、無論文学が一番いい。この意味で私は日本文芸の翻訳紹介だけは爲たいと思ふ》¹

二葉亭は二度目の日露戦争はどうしても避けねばならぬと主張する。その対策のひとつとして彼は日本の美女をシベリアに送り国際結婚をすすめることを以前から考えていた。《資金を出してくれる人があれば、ウラジオストックあたりで自分が売春宿を経営してもいいとまじめに言ったことを魯庵が思い出しているく…》。二葉亭は明治時代の多くの男性と同じく、売春を必ずしも罪悪と考えていなかった。同時にまた売春婦であってもいっさい同じ人間として扱い、決して差別をしなかった。日本近代文学の伝統のなかの一人であった》²と《二葉亭四迷》の著者小田切秀雄は書いている。

送別会の席上で二葉亭はまた「国際問題」について語る。この国際問題に入るために彼は朝日新聞の特派員の資格でペテルブルグまで出かけていくのである。首都ペテルブルグの有力新聞『スローヴォ』紙のインタビュー申し込みは二葉亭にとってのがすことが出来ない好チャンスであったに違いない。ペテルブルグに到着して6ヵ月がすぎている。

二葉亭のインタビューには彼の肉声が聞こえてくる。そして記者A・トイルコフは日本作家の行動思考様式を鋭い見方でさぐる。彼女の新聞記事には、当時のロシア知識人がみた二葉亭、彼の風貌、教養のあるふるまい、洗練されたロシア語とロシア文学に関する深い認識、人類文化に対する日本作家の態度が強い好感をもって書かれている。二葉亭の心持がロシア人に通じている。

記者の観察は夏目漱石が描写した朝日新聞社時代の（1907年）二葉亭の印象記と非常に似ているところがある。《君の風采はどこからどこまで四角である。頭迄四角に感じられた。〈…〉然し其上にも余を驚かしたのは君の音調である。〈…〉非常な呂音で大変落ち付いて緩くりした、少しも逼る所のない話し方をする。〈…〉其時余の受けた感じは、品位のある紳士らしい男。〈…〉しかも其修養のうちには、自制とか克己とかいう所謂漢学者から受襲いで、強いて己れを矯めた痕跡がないと云う事を発見した》（漱石。《長谷川君と余》）

二葉亭とのめぐり合いは『スローヴォ』紙の記者にとってひとつの発見でもあった。彼女はヨーロッパのいろんな国で多くの知識人たちと出会い彼等の精神構造に及ぼしたロシア文学の影響について聞いている。今彼女は日本の作家と対談しながら《芸術の不思議な力によって親戚の間柄になったこの異民族の代表者たち》を思い出している。そしてこのすぐれた「コスモポリタンの」知識人たちの系列に二葉亭をふくめている。ヨーロッパと平等の対話出来る東洋文化人—これが20世紀

初頭ペテルブルグロシア知識人に残した二葉亭の印象であった。

対談では日本におけるロシア文学の影響について問答が交された。《彼は我等の偉大なる作家たちの功績と誤りについて慧眼な批評を始めた。彼の言葉は我等を区別する境界をまったく無くしてしまう。まさに東洋と西洋を離間する、あの人種と文化の分離を排除するのであった。》³ トイルコワ記者はその場の雰囲気伝えてる。

二葉亭は小説《クロイツェル・ソナタ》におけるトルストイの結婚観をはっきりと否定する。小説の主人公は自分を裏切った妻と姦通した男を殺す。妻は彼にとって肉体的慾望をみたすひとつの道具にすぎず、精神的な生活が欠けていたことが悲劇の原因であったとトルストイは云う。理想的な夫婦関係とは、彼によれば、男女が純潔を保つこと、男は廉潔の士、女は処女の状態である。恋愛と結婚は罪でないと二葉亭は考える。日本の作家の意見はソフィヤ・アンドレエヴナ夫人の考えと共鳴するところがあったろう。トルストイ夫妻は意見を交わしたに違いない。しかしそれを裏付ける証拠はトルストイの日記にも、手紙にもまだ見つからない。

《クロイツェル・ソナタ》を強い反抗心をもって読んだ二葉亭もトルストイの芸術の力に圧倒される。《警句を使はうでもなければ美しく面白く書かうでもない。唯思ひの儘を有りの儘に書いている。それでどうも一つまり観察や思想が雋拔で深刻である為だろうが——句毎に恐ろしい力がある》(1906年。作家の手帳15)

しかし、トルストイに対する二葉亭の態度をツルゲネフ或はドストエフスキのそれと比べると何か冷たさを感じる。その理由として《二葉亭四迷研究》の著者佐藤清郎は社会思想家トルストイへの反抗感をあげている。又トルストイが書く大河小説も日本の小説家が好むところではなかったと云う⁴。1905年の春から夏にかけて二葉亭は熱心に《復活》を読んでいながら、それを愛読書の中には入れていない。彼が訳したトルストイの小説はただひとつ《つつを枕》。原作の題目は《林木伐採》。

《戦争と平和》が日本語で初めて抄訳、出版されたのは1886年、題名は変って《泣花怨柳 北欧血戦余塵》となる。この翻案ではナポレオンを絶世の英雄としてたたえ、雪のロシアにおける彼の非運を嘆いている。訳者は東京外大の出身、二葉亭の学友森本である。二葉亭は《戦争と平和》を読んだに違いない。この大河小説をめぐる当時のロシア言論界における論争を彼は如何にみていたのだろうか？トルストイの考え方の根底には停滞した東洋哲学、特に老子の「無為」思想が横たわっており、それに従って描写したロシア軍最高司令官クトゥゾフの形象はロシア軍に対する冒瀆だと非難した。《トルストイの学説は近代思想家たちが我等に教えた理論とは全く相反する。誰が正しいか？オーギュスト・コントか、それともトルストイか？西洋か東洋か？誰が世界の歴史を引いて動かしていくのか？ヨーロッパ人かアジア人か？》⁵と著名な評論家シェルグノブは反問する。この問いに対して二葉亭はどのように対応したのだろうか？

オーギュスト・コントとスペンサーの実証主義哲学は一時日本でも勢力を占めた。それに逆らって老荘思想は時代おくれと思われ20世紀初頭の哲学雑誌から排斥された。しかしトルストイは《戦争と平和》を書き終って思想の一大転換があった時初めて《道德經》を読み、その思想の深さを認識し、自分が一生涯探していた真理をそこに発見したと告白する。トルストイは《老子》のドイツ語訳をいつも自分の脇にもっていたと伝えられている。

二葉亭は若い頃からコントの哲学と出合っている。内田魯庵は《恐らく二葉亭の思想の根本基礎を作って終生を支配したのはコントのポジティブキズムであつたらう》と推定する。(内田魯庵、おもひ出す人々1909)。中村光夫は《二葉亭がどれほどコントを読んでゐたかは明らかではないが、少くとも彼の晩年に達した思想とコントの人間教との間に或る気質的な類似が存するのではないか》⁶と推測する。同じく実証主義哲学の創始者の一人であるスペンサーの名は二葉亭の日記にたびたび出てくる。実証主義哲学に共鳴した二葉亭にとって《老子》はやはり「停滞の哲学」であつたに違いない、そしてトルストイの思想は受け入れなかった。1905年あたりの作家の手帖には《ト(トルストイ)のような人間があるから、益哲理を研究して其蒙を啓くことも必要となる》とメモがある。

《戦争と平和》を東洋思想の立場から再考しようとする試みは最近始まったばかりである。

対談の中で二葉亭が打ち明ける創作談は新しい意味を帯びる。代表作《浮雲》に対する作者自身の解説が面白い。この小説について学術上の論争が絶えない。主人公文三の性格に関する問題である。《日本文学史辞典》は、同種の出版物が概してそうであるように、もつとも定着した評価に依拠しているが二葉亭論では次のように述べている。《主人公文三は日本近代文学における最初の余計者である。〈…〉。文三の形象が最初ツルゲーネフまたはゴンチャロフの主人公からのヒントによって企てられたと想像することもできるが、しかし描かれた文三は日本社会の余計者である》⁷。

二葉亭はインタビューで全く別のことを云っている。《私の最初の小説は主にドストエフスキー、特に彼の心理描写の影響を受けて書きました。〈…〉私は古い日本と新しい日本を描いています。古い日本には多い偏見と悪風、無知がありますが、しかし基盤が強く、そこに深く根をおろしていました。新しい日本は〈…〉たよるべき基盤が無く皆表面に浮んでいてすべてが不安定です》。

作家のことばは執筆が3年続いた小説の創作意図の進展を説明している。物語りの中心には過渡期日本における社会的不公正の犠牲となった小官吏文三が設定される。新旧イデオロギーの衝突は後方に退いて、この作品の社会的背景となる。文三は近代化する明治日本の大都市で出世しようという幻想の崩壊を身をもって味わう。ここに《浮雲》とドストエフスキーの社会小説との接点が生ずるのである。

《文三は社会的抑圧に打ちひしがれた、「ちっぽけな」人間である。彼は、高遠なテーマを華々しく論ずるルージンやライスキーのような「美辞麗句の輩」とは似ても似つかない。文三は内向的で臆病で、自分の考えを決してはつきりとは言わず、黙って自分の十字架を背負っていく覚悟である。この点で意義深いのが「叱るよりは謝罪の方が文三には似合ふ」という作者の言葉である。」⁸—これは福岡ユネスコ協会主催による第四回日本研究国際セミナー'89で発表した私のレポート《二葉亭四迷《浮雲》の問題点》からの引用である。私は以前から《浮雲》の「余計者の性格」を否定して来た。二葉亭による文三の性格描写は余計者の性格に全く当てはまらない。『スローヴォ』紙記者とのインタビューを読んで私の解釈が作家の構想の真の意味を歪めていないことがわかった。

周知のようにロシア文学の翻訳は二葉亭の一生の仕事であつた。この仕事の文学史的意義を彼は国際的意味と関連して考えていた。二葉亭にとって「国際的意味」とは《最も有意味だと思われることをめぐる緊張した行動的生活への夢の

ことであり、彼の詩であった」⁹

二葉亭は最近彼が翻訳したレオニード・アンドレエフの作品《赤い笑い》（訳名《血笑記》）とアルツィバシェフの《サーニン》にもふれている。《私の出版社はこの本（《血笑記》）が日本の読者の間で大好評だと言っています。立派な作品です。迫力があります。しかしもし《サーニン》を訳したら評判はもっと高くなると思います—と、彼はかすかなほほえみを浮かべながら話し続ける》。この《かすかなほほえみ》をティルコワ記者はどのように受け取ったのだろうか？二葉亭のアイロニーを彼女は察したのだろうか？実は、二葉亭は《赤い笑い》を訳していながら原作者に対しては不満であった。《大嫌い、嫌い！奴め、世間の人気に有頂天に為ってゐやがる》—と横山源之助の《回想》にある。

表現派芸術に近い反戦論者アンドレエフが描く血だらけの赤い笑いの表象は読者の神経に強い作用を及ぼす、しかし戦場の真実は彼が物語る＜戦争の狂気と恐怖＞よりもっと恐ろしいものだ—と二葉亭は考えていたと思う。アルツィバシェフの《サーニン》を二葉亭は訳していない。1913年武林無想庵の翻訳で出版された。

1909年1月、ペテルブルグ《スローヴォ》紙の記者ティルコワが二葉亭のインタビューを元にして書いた記事は《ペテルブルグの二葉亭》を知るための貴重な材料である。次に《スローヴォ》紙に発表されたティルコワの記事全文を私の日本語訳で紹介したい。

『日本の小説家』

A・ティルコワ

外国で私がたびたび深い感動に打たれ、誇らしい気持で心が一杯になったのは、コスモポリタンの知識人達の精神構造に及ぼしているロシア文学の影響とその権威であった。私はフランス人、英国人、アメリカ人、ドイツ人、イタリア人達と出会う機会があった。彼等は皆『戦争と平和』或は『罪と罰』を読み、その作品が彼らに与えた忘れがたい印象について歓喜にみちた声をあげて語るのであった。スラヴの大作家たちが、ぬぐいがたい跡を残しており、また彼等の精神的自我の形成に役立っていることがわかった。

芸術の不思議な力によって親戚の間柄になったこの異民族の代表者達との出会いが残した思い出は、今ロシア国民の精神力と未来に対する信念が、そんなにたやすくゆらぎ始め疑念と憂うつが心に重くのしかかる時、私をたびたび元気づけてくれた。

数日前、私は我等の思想的指導者達の権威は西洋だけでなく、わが国の軍事力が老朽し、みじめなものになったことが表面化したあの東洋にまで広がっていることがわかった。

私の前に一人の紳士が坐っていた。黒い髪は短く刈っており、顔は黄色味を帯びて浅黒く、金ぶち眼鏡の向こうからは重いまぶたでおおい隠された細い眼が静かに注意深く周囲を見守っていた。悠長なロシア語会話、正確且つ文学的表現、ロシア語を習った西洋人風の発音とは違うアクセント。むしろ、シベリアに居住する異民族の人達のロシア語発音から決して消えることがない喉音が多分に聞える。

私のお客は日本の有名な作家長谷川辰之助である。彼はロシアに来てわずか6カ

月にすぎない。しかしロシア語はずいぶん前からわかっている。彼が住んでいた東京で習った。トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲネフの作品を翻訳している。

——私の最初の小説は主にドストエフスキー、特に彼の心理描写の影響を受けて書きました。その時私はまったく若者でした。20年ほど前のことです。——このように話し始める長谷川氏の顔には悲しみともせせら笑いともつかないほほえみが浮んだ。——この小説には若者的な大胆さがあります。しかし評論家たちは今でもそれを私の最もすぐれた作品と見ています。

——小説の名前は？

彼はほんのしばらく適切な言葉を探し求めた後、以前と同じほほえみを浮かべながら続けて話した。

——『浮雲』（『Плавучее облако』）。私は古い日本と新しい日本を描いています。古い日本には多い偏見と悪風、無知がありましたが、しかし基盤が強く、そこに深く根をおろしていました。新しい日本はより明るく善良ですが、たよるべき基盤が無く皆表面に浮んでいてすべてが不安定です。人間は若く、そして何ごとかに熱中している間は新しいものを追求します。しかし歳をとるに従ってこのすべてを失います。そしてまた後にもどります。

——すると、それは『父と子』に似ていませんか？

——そうかも知れません。私はその時、バザロフに夢中になっていました。今も私は彼が好きです。すばらしい。

——では、あなたが日本文学において成しとげた革命についてお話し下さい。

彼は笑い出した。自分に対する過大評価を退ける賢明な人達がいつもするように、彼は礼儀正しく言った。

——何故革命を……いや、そんなことはしておりません。私達はただ言葉を変えただけです。私達以前には読者大多数にとって難解な古い言葉で作品を書きました。それはあなた達の教会スラヴ語に似たものです。私の小説は平凡な口語体で書かれています。勿論騒ぎを起しましたよ。しかし今は誰も皆そんな風に書いています。

——あなたの作風は？

——ああ、私は自然主義派です。必要なのは真実と心理描写です。私はツルゲネフ、トルストイ、ドストエフスキーの弟子だと前に言ったでしょう。——全く異なる文化で育ち賢明で自制力が強く、我等にとっては見通しのきかない彼の顔が突然燃え上がった。長谷川氏は意外に熱っぽく語りだした。

飾り気なく、ごく地味に彼は我等の偉大なる作家たちの功績と誤りについて慧眼な批評を始めた。彼の言葉は我等を区別する境界をまったく無くしてしまう。まさに東洋と西洋を離間する、あの人種と文化の分離を排除するのであった。

——最近私が翻訳したのは『赤い笑い』です。私の出版社はこの本が日本の読者の間で大好評だと言っています。立派な作品です。迫力があります。しかし、もし『サーニン』を訳したら評判はもっと高くなると思います。——と、彼はかすかなほほえみを浮かべながら話しつづける。——我が青年たちは今こんな本に飛びつきます。わが国にもやはり人心の動揺があります。だが翻訳は不可能でしょう。検閲で発禁になります。

——検閲はあなたの国にもあるのですか？それは政治論文に限って？

——政治関係のものについてはほとんどありません。わが国には憲法がありますからね。——と日本の作家は静かに答えた。——しかし道德問題に対しては非常に

厳しいのです。

——『サーニン』を訳したい気持ちをあなたはもちですか？

——そうですね、——と彼は自信なさそうに答えた。——この作品は肉体に与えるものが多すぎる。肉体と心を切り離してはいけません。それは不可分に結びつけられています。しかし今まで肉体のことを忘れがちでした。わが国でも無視しました。これは異常です。ゆがんだ人生は駄目です。ほら、お国のトルストイ、——と言いながら彼は再び生氣にみちてきた。——結婚についてトルストイはどのように書いていますか！？夫婦は努めて性欲を自制するようにすすめています。記憶していますね。これは何んということですか。もしも結婚が罪であるなら結婚なんかする必要はないでしょう。妻と寝てもいい。ただあまり夢中になりすぎてはいけません、と人達に言われますか？『クロイツェル・ソナタ』にも……。結婚をそのように取り扱うべきではありません。

——女性に対するあなたの国の人達の態度は？

——あのですね、わが国では家族が国家の基盤となっています。家長がすべてです。——用心深く答えながら、彼は何かを惜しむように付け加える。——しかし、これも少しづつ変って来ています。

この問題について彼は自分の意見をもっており、危惧の念を抱いているように見えたが、今のところ私達に打ち明けたくないようであった。私は話題を変えた。

——あなたの処女作については、すでにお話を聞きました。最近お書きになった作品は？

作家たちがしばしば自分の作品を語る時に表わす少し皮肉がかったほほえみが、彼の黒っぽい落ち着いた顔に浮かび上がった。適当な言葉がすぐ見つからないためか彼は一瞬思いとどまる。

——私は作家たちを批判しました。……まあ、彼等に反対しているわけでもありませんが。あのですね、作家はふだん一方的に成長していきます。片目の人間になります。アメリカの哲学者エメルソンは人間を「感じる」、「考える」、「行動する」存在と規定しています。この三つめの行動することを私達は忘れていきます。それで病人のようになっていきます。そのことを書きました。まあ、作家達にとって不快なことをいっぱい書きました。

——勿論、あなたに対して悪口を言っているでしょう？

——あるものは私を非難していますが、他のものは私が正しいと思っています。しかし詳しいことはわかりません。私は小説の原稿を出版社に預けてすぐあなたの国ロシアに出かけました。今私は小説家ではありません。——とまたもや微笑を浮かべながら話した。——私は政治記者です。

——つまり行動する人間になったわけですね。

——やってみます。——と私のお客は慎重に答えた。——まあ、今のところそれを臆けていると言った方がもっと正確かも知れません。

彼は帰った。私達は今まで見落としていた、現代人類の道徳的・美学的体験のすべてとしっかり結ばれているロシアの芸術、世界に広がるその影響について、何か新しい事実に出合ったような感銘にとらわれた。まさに電信線の如く、我等共通の普遍的な思考が眼に見えぬ糸で全地球を取り巻いている。そして諸国民と諸人種、もしかしたら諸宗教をも含めての間に築かれた深い知的淵があたかも縮まってゆくようであった。

注

- 1 二葉亭四迷全集 第5巻 東京 岩波書店 1938. 331頁。
- 2 小田切秀雄 二葉亭四迷 東京 岩波書店 1970. 186頁。
- 3 A・トイルコワ 日本の作家 新聞《スローヴォ》 ペテルブルグ 1909年1月11日。
- 4 佐藤清郎 二葉亭四迷研究 東京 有精堂 1995. 429頁。
- 5 N・シェルグノブ 著作集 サンクト・ペテルブルグ 1895. 第二巻 392頁。
- 6 中村光夫 二葉亭四迷論 東京 進路社 1992. 175頁。
- 7 藤村作・西尾實監修 日本文学史辞典 東京 日本評論社 1954年 722頁。
- 8 キム レーホ 二葉亭四迷《浮雲》の問題点 福岡ユネスコ協会編 《世界が読む 日本の近代文学Ⅲ》. 東京 丸善株式会社、1999. 251-252頁。
- 9 小田切秀雄 前掲書 187頁。